

榎牟礼城跡に登って

佐伯 八枝子

(会員・宮崎市)

佐伯を訪れる度に、祖先の居城であった榎牟礼城のたぐずまいを遠く眺めながら、一度は尋ねてみたいと思っ
ていましたが、これまでその機会がありませんでした。

祖先である佐伯氏の供養のために、去る十一月二十四日、佐伯市にまいりました。駅に着いてタクシーに乗り宿に行く前に、前副会長兼事務局長の清田先生を訪問しました。

春の「佐伯史談」誌上に、体調が悪く、そのために役職を辞退され、療養中とありましたので、その後、病状はどうだろうかと案じながら、お宅をお尋ね致しました
処、思いのほかお元気で安心致しました。

その際、
「榎牟礼城跡に登ってみられました」

との先生のお言葉に

「残念ですが、まだです」

とお答えしました。

その日、折悪しく天気は曇り空で、ときどき霧雨が降るような有様でしたが、先生は、

「では御案内致しましょうか」

と、申して下さいました。それで先生の御厚意に甘えて、娘と孫も一緒に榎牟礼城跡に登ることにしました。

車で行き、弥生町側から榎牟礼山麓の車止めの地点まで行きました。道はよく整備されていました。聞けば、弥生町の方々の奉仕作業によるものとのことでした。

そこから歩いて、山頂まで七百メートル程を登りましたが、何ともけわしい山でした。途中何か所にも頑丈な綱が張られてありましたが、そのお蔭で、二歳四か月の子連れの女の足でも登ることができました。綱を持つ度

に、これを張って下さった方へ感謝しながら引張らせて貰い、一步一步と、やっとの思いで頂上まで登ることができました。

御案内して戴きました清田先生の詳しい御説明を聞きここに惟治公父の率いる佐伯軍の将兵がたてこもり、山麓に押し寄せた大友軍の先手臼杵長景二万の大軍を寄せつけず、攻めあぐんだ長景の謀略とも知らず、その言を信じて城を出た惟治公が、尾高智山の露と消え給うとはあまりにも哀れであり、悲しい末路を思い、涙を催しました。

ここが、佐伯氏十四代四百余年の居城だったのかと思うと、感慨無量でした。苔むした古い墓石にも涙を流し祖先の霊を弔いました。

ここ山頂には、佐伯史談会が建立して下さった「榎牟礼城趾」の記念碑があり、最近「弥生町歴史と文化を語る会（歴史文会）」の方々の大変なお骨折で建立された「佐伯神社」に詣で、思いはるか四百余年の昔に馳せました。

やんでいた雨がまた降り出し、あたりは乳白色の霧に包まれました。霧の薄れゆくにつれて、四方の山々を見

渡せば、驚くことに白雲の海。それは実に見事な雲海でした。高い山々の山頂のみを残し、ことごとく雲海に包まれた景色は、神々しくも壮麗でした。筆舌に尽せぬ光景は、まるで日本画の名画を見るような思いがしました。思いもよらぬ一刻の眺望は、先祖が私どもに与えて下さった恩恵ではなかったかと、今も思っています。

今日、一族の者は各地に四散して、長い間その消息もわからず、互いに連絡するのめかなわず過してきましたが、近年佐伯史談会のお蔭で「同族会」が結成されました。まだ少数で、一族で祖先をまつる程の力はなく、佐伯地方の多くの方々の長い間の御厚志によって、祭祀を戴いております。人の情有難さ、今城跡に立ってしみじみと感じられ、感慨無量でした。

近いうちに、山上近くまで車道ができる計画とのこと。弥生町の方々に深く感謝しながら下山しました。弥生町の皆様、関係者の皆様有難うございます。ゆかりの地の益々の御発展を心からお祈り致します。